

## 一. 人すなわち滑稽、俳句すなわち滑稽俳句

山下正純

### 音楽の縁が取持つ夏課題

周辺情報は別として、この論壇への投稿という大きな夏課題のお話は、某有名オーケストラのコンサートにて偶然にも八木先生と席がお隣になったことからいただくことになった。従って冒頭から言い訳になってしまうが、以前ご紹介いただいた「この人」というコーナーの延長線上のつもりで軽くお話を進めさせていただけたらと思っている。

今更言うまでもないが、俳句評論家の山本健吉はエッセイ「挨拶と滑稽」のなかで、俳句の本質として三ヶ条をあげている。これが有名な「俳句は滑稽なり。俳句は挨拶なり。俳句は即興なり」である。また、そもそも俳句のルーツとして俳諧連歌の冒頭の発句が独立したのが俳句であり俳句の「俳」の一字には「こっけいなこと。おどけ」といった意味がある。そういったことから拡大解釈が許されるならば、「俳句」は限りなく「滑稽俳句」そのものと言うことができる。

更に、ここからは自論ではあるが、以前「この人」のコーナーで紹介させていただいた滑稽の定義として「限りある命に由来するもののははれを受容した境地」との考えから、お許しいただけるならば、本来的に滑稽の本質を持ち合わせた「人」から生まれ出た「俳句」は、生まれながらにしておのずと「滑稽俳句」としての素質を備えているのである。八木先生が

いつも口にされる「俳句は言葉のスナップ写真」。多くの場合そのスナップ写真には、人が誰しも共有する人として逃れることのできない「ものものあはれ」が色濃く染みだしてきて、それがゆえに共感を覚えるのである。そして、その共感は、(少しSFっぽい言い方になるが) 時空をも超えて、人と人を結びつける心の交流を実現するのである。

古くは「万葉集」の最後におさめられた「あらたしき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事(よごと)」の歌で、大伴家持が京を遠く離れ苦境の中にあって赴任先の部下に、降り積もる雪のように吉事が多く訪れますように、と年頭の辞を述べて心の交流が図られているように、言葉によるこのような心の交流力は、古来遺伝的に備わっている日本の誇れるアイデンティのひとつと言ってもよいのではなかろうか。

話を俳句に戻して、「ご自分の子孫へはお金を遺すより、俳句の一つでも遺した方がいい」とは、八木先生からのお言葉であるが、まさにそれを実感する出来事が自分の身にも起きた。老後に祖母が長年暮らした古家を訪れた際のこと、額におさめられた次の句が目飛び込んできた。

**押車露地へ秋刀魚を売りに来し**

**寄せ鍋やわりこむ孫をひざに抱き**

この句によって、今は亡き祖母のお人柄が偲ばれ、ここに心の交流がまさに「時空を超えて」実現したのであった。

(続く)